

働きたくない者は、食べてはならない 曾野綾子

■途上国援助の在り方を考えさせられると共に、書名「働きたくない者は、食べてはならない」にピッタリの情景が描かれている。

収穫直前に農作物を盗むというのが、貧困な社会の卑劣なやり口である。こういう事態が続くと、そのうちにばかばかしくなって誰も農業をしなくなる。黙って働かずに飢えて見せて、援助の食料をもらう方がずっと理に適っていると思うようになるのだ。

日本人は善意で木を植え、必ず村人たちはそれを喜んで協力して育てていると信じているが、そして一部の土地ではそのようになっていっているとは思いますが、まだ細っこい苗木であろうと、人が見ていなければ引っこ抜いて薪にする人たちも必ずいたはずだ。

一九九二年にカンボジアのタケオに進駐した日本の自衛隊は工兵の部隊で、翌年の国民投票に備えて、人々の移動を楽にするように道路を整備していた。その工事の現場には必ず道幅を示す小さな木の楔（くさび）が、一定の間隔を置いて打ち込まれていた。この楔型の木片が始終盗まれていたのである。誰が取っていくかということ、そのほとんどは孝行息子や娘である。

■野焼きには別の意味があった。

しかしアフリカの野焼きは、焼き畑の目的ばかりではなかった。巨大なネズミを追い出すためだった。ネズミが害獣だから、追い出すのではない。そのネズミを捕らえて食用として売るためである。そのネズミは、逆さにして売っているのを初めて見たときには、ウサギを売っているのかと思うほど大きかった。目の前のネズミを追い出して現金にするために、森に火を放って平気な人たちが今でもれっきとしているのである。

■ある女性のチリでの晩年——自分の生ぬるい生き方とのギャップに驚く。

修道院を出た彼女は、サンチアゴ郊外の二万平方メートルの広大な、電気も水もない土地を、死んだらお墓を作るという制約を条件にただで政府から払い下げる制度を使い、そこに住み着いていたのであった。正確に言うとお墓代はただではないがたった三ドルで、しかもそれを六回払いのローンでいいというのである。

炊事は戸外の薪とガス。ガスのボンベだけは、元殺人犯で観察保護中の男が持つてくるといふ。

自分で半分建てたという小屋には電気も暖房の設備もない。狭い部屋で暖房やローソクの灯は火事を出す元だから、日が暮れると眠る生活である。自分で働いてジャガイモを二百五十キロ、イスになりそうな巨人カボチャも採った。果樹園には百五十本の果物の木を植えた。だから飢え死にはしないと云う。しかし女一人で暮らしているので、一晩でも家を空けたら、近隣の男どもに何をされるか分からない。今までにも、土地を取られかかったり、表札の看板に嫌がらせにピストルをぶち込まれたりした。そこで彼女は「この低能め！ 立て札を抜くな！」という意味の強烈なスペイン語の看板を出した。

一月に一度、二十キロを歩くかヒッチハイクをして、町で買い物をし手紙を受け取る。彼女は蛋白質の供給源として兎を飼っていて、時々殺して食べるという話だった。しかもそのレシピは、東京の帝国ホテルの出したフランス料理の作り方だった。皮はなめすために小屋の壁に貼り付けてあったのが印象的だった。